大規模農業地帯・十勝での新規就農有機栽培

小畑農園代表 小畑 拓

私が帯広畜産大学の別科に入学し、帯広に移り住んでから13年になります。初めて飛行機でとち帯広空港に着陸するときの上空から見た景色はいまだに鮮明に覚えています。真っ直ぐな道に豆粒のような車が点々と走っていて、その他は一面が真っ白な四角形。飛行機が高度を下げると共にそれが畑であるということに気がつきました。その四角形をかたどっているのはカラマツなどの防風林で、所々に大きなD型ハウスと倉庫、牛舎、家屋などの建物があったのです。ビルも家も何もかもがぎゅうぎゅう詰めに乱立する都会の街に育ち、農業に憧れ、自然に憧れていたボクは、いまでもこの景色を原点にして自らの畑を考えることにしています。

私の住む北海道帯広市という所は、東西北の3方を山に囲まれ、南に太平洋が開けた広大な平野を、十勝川をはじめとする多くの川が流れる農林水産業の一大生産地である「十勝」の中心都市であり、近年では市長の掲げる「フードバレー十勝」のスローガンのもとで農商工連携や6次産業化など多くの取り組みが産学官を問わず試みられています。

十勝総合振興局の統計によると、十勝全体の農家戸数は6,120戸、農業従事者18,943人、総耕地面積255,100ha、農家1戸当たりの平均耕地面積は41.7haとあります。食料自給率は1,100%といわれています。文句なしの農業都市だといえます。

このような広大な十勝に小畑農園が誕生したのは今からわずか4年前で、私の畑は十勝の平均のおよそ100分の1の45aです。私の名

前がそっくりそのままの「小さな畑」です。この小さな畑で妻と二人で約50種類の野菜を作付けして、収穫のほとんどを直売しています。

私の農園で取り組んでいる有機農業は、十勝6,120戸の農家のうちわずか21戸しか国の定めたJAS認証を取得していないマイナーな農業です。私がこれほど広大な農地がある十勝で、わずか45aの畑でこの有機農業に取り組んでいるのは、自然が好きで虫が好きだということもありますが、農業と自然の関係に違和感を持ったからでもあります。私は帯広の上空から畑を眺めるまでは自然と農業をイコールで考えていました。しかし、あの景色は「畑は人工物であり、農業は人類最初の自然破壊である」と感じさせる景色でした。

では、どうすれば自然と農業が寄り添うことができるのか？と考えてきましたが、今では「農業は自然破壊によって始まったが、自然を受け入れることで環境を保護することはできる」と考えています。有機農業によるコンパニオンプランツや、天敵昆虫による生物防除の効果、雑草から作物、全ての虫や微生物、菌といった畑全体が多様性による相互関係でバランスを取っていくことによって畑にほとんど経費がかからない農業ができるようになりました。こういった畑に関心を持ってくれる仲間も毎年増えています。収穫体験や学生の見学もオファーをもらうようになりました。これからは、この「小さな畑」が野菜だけでなく多くの人と自然とのつながりを生んでいけるように取り組んでいきたいと思っています。

(おばた たく)